

指 定 討 論

井 下 理 (慶應義塾大学総合政策学部教授)

(井下) 慶應義塾大学の井下です。今年は時計台の周りの塀がようやく取れて、素晴らしい木、素晴らしい講堂の中に、今日初めて入りました。施設設備の充実というのは本当にうらやましく感じています。実は先週、絹川先生とある会合でお会いしたときに、「来週は君が私を批判する立場だ」と突然言われました。私はそのような役柄という意識がありませんでした。今日の発表、基調講演を受けたあとの話題提供のかたがたのお話を伺って、何かコメントさせていただきます。与えられた時間は10分ということです。OHPを用意しましたが、今までの流れと全然関係ないところから自分の思っていることを話しても面白くないと思いました。

今日はお話を伺って、いろいろなことを感じました。今日のタイトルを「今こそ問い直す大学教育の改善と COL」などと順番を入れ替えてみたりしましたが、あまりよく見えてきません。先ほど林先生が「教育 COE」という言葉を使われました。COE との関連をもっと問題にしないと、COL の姿は見えてこないのではないか。なぜ文科省は同時にこの二つのものを出して、それぞれにどのような予算配分をしているのかといったことを明確にした中で、高等教育をこれからどのようにしていこうとしているのか。あるいは独立行政法人、「独立」という言葉がありながら、実は片方でかなりコントロール、あるいは片方でかなり依存型になっているのではないか。FD を推進しなさい、こうすると FD がよくなります、規制緩和をしますが、評価を受けねばなりません、特色ある教育プログラムを展開してください、など。これが本当に個々の大学の独立を認めた形の高等教育行政なのかという疑問を持ってしまう。そういった形で上から細かく指針が降りてくる、あるいはそれを待つ、そうした展開でわが国の高等教育は、今後どうなっていくのかなと心配になります。

FD あるいはティーチングは言うまでもなく大事ですが、実はティーチングの基になっているリサーチや、個々の大学人が自分の研究活動をどう考えているのかということ抜きにして、ティーチングや評価を考えられるのだろうか。評価疲れという言葉がかなり多くのかたがたの間で聞かれています。大学評価・学位授与機構の評価委員になり、評価をさせられた人々、あるいは大学基準協会の活動でのいろいろな立場の評価委員のかたが、ここにも大勢いらっしゃると思います。今日はそういうことを言い出せばきりがないのですが、みんなお互いに分かっているわけです。「あの短い時間に、あの予算で、コピーの機械が何台しかない中で、よくこれだけのことができたな」と。あるいは、そのように教育を評価する目を我々が持ち始めたこと自体は、喜ばしいことだと思っているのですが、一方で本当にそれでいいのだろうかという気持ちが、今日も強くしているわけです。

COL で本当に大学教育の改善は実現可能なのだろうか。いや、そもそも COL でという発想を持ってしまっているのだろうか。何かで大学の教育の改善が可能になる、そう考えてしまう。授業や教育改善のツールやシステムを探したり、みんなが利用できる共同利用機関があれば、もっと大学の授業はよくなるのではないか。私もついそのように思いますし、そういう希望を持つこともあるのですが、その発想自体を我々はもう一度問う必要があるのではないか。行政主導の大学改革というのは、本当に大学改革なのだろうか。

あるいはいろいろ語られる中で、しばしばビジネスモデルがあたかもすべての問題を解決するモデルであるかのように語られます。しかし教育の現場では、評価を気にして学生に教えるということを本当にやっているのだろうか。「冗談じゃない。学生の授業評価を気にして真剣に相手に向かえるか」という気持ちが、どうしてもっと出てこないのだろうか。私はこれでいいのだろうかと思います。しかし、これが通らなかったら COL が来ない。COL でわたしたちの大学がよい大学だと思われなかったら、受験生、応募者が減ってしまう。そういう非常に追い立てられたような感情で、日本の大学が右往左往していてよいのだろうか。

交換モデルなどというのは、あるビジネスシーンの中では有効かもしれませんが、いや、ビジネスの世界ですら、今や単純な交換モデルに限界があるということは盛んにいわれているわけです。なぜ、そんなものを大学があとから追いかけていって、何とか競争原理によってすべての問題を解決しようとするのか。そもそも、そのような発想自体が

どこかおかしいのではないかということ、日本の大学人がみんな一緒になって言い出さないといけないと思います。すべてのそういったモデルがビジネス中心であったり、あるいは行政主導型で大学の在り方が決められていくことの怖さ、あるいはその問題点を大学人自らが指摘しなければ、社会の中で何のために大学という組織があるのか、あるいは制度があるのか、我々が自分で自分の問いを封鎖しているようなものだと思うのです。

そのような議論が今日これから活発に行われるだろうという期待があります。大学改革のマニュアル化とは何なのだろうか。あるいは競争原理の万能化。大学間の競争をあおって、予算が欲すれば競争して、もっとよい大学教育プログラムを提示してみる。そんな高飛車なことは言っていないかもしれませんが、討論を活発にするため、あえて言葉を荒げて言うならば、そういうことではないでしょうか。

やはり我々自身の発想をもっと根本から自己覚醒していかないといけないのではないかと、私は文科省自身がほかの省庁から、そういったモデルで多少圧迫されているのではないかとこの憂いを持っています。そうではなくて、大学というところはこういうところなのだ、初等・中等教育すべて教育という場面は、ビジネスの場面で使われるモデルでは問題が解決しないということをもっと強く言わないのか。日本の人材開発という観点から、若い世代の教育に対して、大学は手ぬるいとか甘いとか、大学に対し社会から批判がある。今までのように、あまりにも社会から離れた、象牙の塔で良いとは思いません。大学で教える職にある者が、講義中に学生が寝ていようと起きていようと、あるいは学生の関心がどこにあるかと関心なく、自分のやった研究の一部を披歴して、分かるやつだけ分かればよいというような発想や行動には限界があることは確かです。そうして大学4年間のんびりとしていた学生たちが、国際的な競争力をつけていかなければならない組織の中で、どのようにして考える力を育てていくのかという問題は確かにあります。

だからといって、大学がすべてビジネスモデルを絶対化し、自立を促す外からの強制によって動いていくとしたら、これはやはりおかしくなっていくのではないかと思います。計画行政そのものは、私はよいと思います。しかし、それが研究教育活動を主導していくというのは、どこかおかしいのではないかと思います。研究教育活動、あるいは学術の発展というのは、ビジネスモデルで推し進めることが本当に可能なのだろうか。その保証なしに、やたらと競争原理を持ち込むことでよいのだろうかということを、私はどうしても言わざるをえないと思います。

もちろん我々は日本の大学でありながら、国際的な大学間の教育における競争にさらされていることは確かだと思います。日本の若い人たちが日本の大学を見限って、自分の大事な一生の若い時代の教育訓練を、海外の大学に行って期待するというのでよいのだろうか。日本の大学が、若い人々から見て自分の力を伸ばせるのにもっともふさわしいところと思えるのだろうか。大学で身につける力というのは、即戦力なのだろうか。大学は、企業や官庁に入っただけで役に立つ人材の育成を主たる目的として教育研究を推進しているのか、とんでもないです。むしろ、大学は、今の状況や社会に照準を合わせてそれに迎合するのではなく、すぐに役立たないけれども、じわじわと、いずれ必要なときに必要なものを自分で見つけて磨いていくことができる、そういった最も根本的な力を育てるのが大学だと私は思います。

もちろん、一人一人全部、大学のイメージは違うはずですから、そのイメージを言葉に出して、みんなで議論をしながら、我々は次の世代に何を受け継ぐべきなのかを考えていかなければいけません。単にCOLで採択されたとか、されなかった、あるいはCOEでどのぐらいお金が来た、あるいはそのために学内・学外の競争で勝ったの負けたのと言っていたのでは、何のためにそれをやっているのかが全然分からなくなるのではないかと思います。

手段と目的の混乱があるのではないのでしょうか。改善のために評価をするのです。評価をすることによって、よいところは認めてあげよう、褒めてあげよう、大いにやれという発想自体は何も批判される命題ではありません。私もそれは素晴らしいと思います。地道な努力をしているのに、だれも注目してくれないという気持ちもよく分かります。しかし、注目されたり評価されたりするためにだけ、私たちは教壇に立っているわけではないと思うのです。そんなことはどうでもいい、うちはそんなものは絶対に受けないのだ、外から与えられる評価などに左右されないぞというような、反骨精神というのでしょうか。それが今必要なのではないのでしょうか。現実には財政的に苦しいれば建物だって改修すらできない。新たに300人が入れる教室棟を建てたいといってもお金がないとできない。それは大変なわけです。しかし、いつのまにか「必要なものを手に入れたために一定の評価を得ていないとまずい」と考える。そしてそのために評価を受けて、高い評価を得ることが重要となり、目的となる。そのために授業を改善する。そんな発

想の本末転倒と硬直化が起こる。それでいいのだろうか。私はそこら辺に、今、ある種の危機を感じます。

学問研究固有の意義や役割があるはずで、それがビジネスのロジックや効率主義、Plan-Do-Seeのサイクルマネジメント手法の発想などでどこまでやっていけるのか、その危うさを、私たち自身、本当は気がついているのだと思います。では、どうして気がついていることをもっと前面に出して言わないのか。自分たちは一体何をやろうとしているのかということを本当に考えないと大切なものを見失ってしまうのではないか。大学が大学たるゆえんはどこに求めるのかということを、我々はもう一度ここに踏みとどまって考えないといけません。常に何だかわけの分からない新しいプログラムが次々と出てきて、それに合わせよう、合わせようとする。そうではなくて、その姿勢そのものを大学人が問わなければ、私は本当の意味で日本の大学は、もう一回ここで大学教育改革を根本から立ち上げることはできないのではないかと思います。既存の大学教育のやり方にのっとってこうやりましたというのでは、本当の意味での海外の大学との国際競争力を我々は持ちえないと思うのです。

今日、私が感じたことを率直に申し上げさせていただきました。以上をもって私のコメントといたします。どうもありがとうございました。